永遠の旅路を

椎名　ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠の旅路を

【Ｎコード】
Ｎ４８４４Ｅ

【作者名】
椎名　ルイ

【あらすじ】
目が覚めたのは砂漠の真ん中。その時にはもうそれ以前の記憶は失ってしまっていた。記憶喪失にあった少年「アッシュ」の行く末とは！また、失った記憶の衝撃的な事実とは！作者多忙なので、更新は先送りになせていただきます；

第1話：始まり

【おれは一体なにもの何だ？】

自分自身に問いかける。
記憶がないまま過ごし始めて、もう十日が経とうとしていた。
俺の一番初めの記憶は十日前に砂漠の真ん中に放り出されたところで途切れ、
それ以前の記憶は一切ない。
蒸し暑い砂漠を命からがら渡り、現在は親切な老夫婦が貸してくれた馬小屋
で寝泊りしていた。

【わからない、何もかも。】

混乱はしていたが、泣いて叫ぶほどではなかった。
自分でもこんなに落ち着いているのに驚いている。
実は、自分が忘れた記憶はそんなに大事なものではなかったのかもしれない
と最近、割り切り始めていた。
不便なことと言えば、名前がないことくらいだろうか。
お金はたくさんある。腰につけていた革袋に金貨や銀貨が数えきれないほど
入っていたのだ。
きっと、前の自分は貴族か何かだったのだろう。
どっちにしろ、自分の忘れ去られた過去には興味は持てない。

ウジウジ考えたってわからないものはわからないままなのだ。
明日からは仕事を探そう。これ以上、この心優しい老夫婦たちに迷惑をかけるわけには
いかない。あの人たちだって口には出さないが、自分たちを食いつないでいくので精いっぱいのはずだ。
俺がここにいるのは今日で最後にしよう。

そう思いつくが否や、俺は藁の上に立ち上がり、馬の鳴き声の間をすり抜け
ながら、老夫婦の自宅へと向かった。

第1話：始まり（後書き）

第一話、どうだったでしょうか？

まだまだ始まりの一端にすぎません。
更新が遅くなることもあるかと思いますが、
温かい目で見守ってやってください

第2話：出会い（前書き）

名前、やっと出てきます！
まあ、最初のあらすじのところで名前はもう出しちゃってたんですけどね・・・・
ははは。
てかこれ、前書きで言っていいのかな？

第2話：出会い

「爺ちゃん、婆ちゃん、俺さ明日ここ出ていく。俺がいつまでも居候してたら爺ちゃんたちが食っていけなくなるだろ？」

俺が発した言葉に老夫婦は悲しそうに瞳をふせた。

「それは、それは急な話だねえ・・・。食糧のことなら気にしなくてもいいんだよ？足りなくなったら、牛どもに役にたってもらうこともできるんだから・・・」

「だめだめ。それ、売りもんの牛だろ？売りもんを業者が食べちゃ、だめじゃねえか。俺のことなら心配すんなって！すぐ仕事見つけて、爺ちゃんたちにいっぱい恩返ししてやっからよ！」

俺はそう言ってにかっと笑って見せた。
その笑顔に老夫婦は微笑みを返してくれる。

「そうかい？じゃあ、困ったらいつでも来るんだよ？わしらはいつでもあんたのことを待っとるんじゃから。たまには顔も見せなさい」

「わかった。じゃあさ、最後にわがまましてもいい？」

俺は少し照れくさくて、茶色の髪をまさぐりながら老夫婦の眼を覗

き込んだ。

「なんだい？なんでも聞くよ」

「名前を付けてほしいんだ。・・・ほら俺、自分の名前ないからさ、爺ちゃんたちにつけてもらいたいなあって思ってよ」

そうだ。俺には名前はない。
とうの昔に忘れてしまった。だからこの大好きな老夫婦に自分の名前を付けてほしかったのだ。
身元もわからない俺をまるで自分たちの子供のように接してくれたこの人たちに。

老夫婦はしばらく考え込んだ後、しわがれた低い声でポツリとつぶやいた。

「アッシュ・・・」

「アッシュ？」

俺が聞き返す。

「そう、実はこの名前は死んだ息子の名前でのう・・・。あんた、わしらの息子に似ていたんじゃよ。・・・どうだい？」

「気に入った！爺ちゃん、婆ちゃん、今まで本当にありがとな！この恩は絶対に忘れないぜ！これ、やるよ。少しだけど」

俺はそう言って革袋から2枚の金貨と5枚の銀貨をテーブルに勢いよく置いた。
そして、じゃあな！と手を振って扉を開け、朝日が輝く街へと飛び出した。

【おれは今日から生まれ変わった。
「あっしゅ」・・・・・・・・それがおれの名前。】

「一口に仕事っつても・・・・なあ・・・」

俺は今、町の役場に来ていた。周りは朝が早いというのに人でにぎわい、
喧騒でひしめき合っている。

「へい、らっしゃい！今日の魚はいきがいいよう！」

小太りの女性が威勢の良い声を張り上げて、魚を売りさばいている。

「あのお・・・、ここらで人を雇ってくれるところってないすか？」

愛想笑いをしながら声をかける。

「あんた、仕事探しているのかい？だったらうち来なよ！最近、上の息子
がさ、出稼ぎ行っていないんだ！」

満面の笑顔でそう言われ、早速就職が決まった俺は心の中でガッツポーズをした。
何とも嬉しいものである。説明をするから、と女性が手まねきし、おれは半ば
スキップをするような足取りで店内の奥に入って行った。

「さてと・・・店の説明はこのくらいでいいね？簡単だし、すぐにでも慣れるさ。住み込んで働くかい？」

「はい、わかりました。つか、住み込みでもいいんすか？ご主人もいるでしょう？おれ、邪魔なような気がすんすけど」

おれの言葉にエレナと名乗った女性は豪快な高笑いをあげた。

「何しょうもないことを気にしてるんだい？全く、最近の若い奴らは遠慮が多すぎて困る。相手がいいって言えば本人はありがたく頂戴すればいいんだよ。だから、住み込みな。ただし、家事の手伝いもしてもらうよ。あ、そうだ。あとその敬語やめな。他人行儀だね

え」

エレナはいい人だ。この人とは仲良くなれそうな気がする。
おれの胸は心なしか弾んでいた。

「あんがとな、おばちゃん！おれ頑張るからさ、何でも言いつけろよ！」

「まあ、元気ながきだねえ。ちょっとあんた！このアッシュっていうがきが今日から働くことしたから！よろしく頼むよ！」

店の中がにぎやかでエレナの大きな声でもすぐ掻き消されてしまう。
主人も喧騒に負けじと声を張り上げた。

「おお、こりゃ若くていい野郎がはいってきたな！よし、気に入った。
たっぷり面倒みてやる。小僧！こっちに来い！」

言われるがままに多くの人ごみの中をすり抜け、主人のもとへ向かう。
主人はまず、自分の名前をジョゼフと名乗った。
握手を求められ、笑顔で交わす。

「さあ、今は稼ぎ時なんでね、今すぐ働いてもらうぞ。まずは・・・

あれ、裏の倉庫に運んでくれねえか？」

そう言ってジョゼフが指さしたのは、大量の段ボール箱である。
新鮮な野菜や取り寄せた調味料が入っているのだそうだ。

「わかった！裏の倉庫に置けばいいんだよな？」

腕まくりをしながら俺が気合いの入った声を出す。
ジョゼフから鍵を受け取り、いくつもの箱を両腕に抱えて仕事に取り掛かった。

第2話：出会い（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
感想や、アドバイスなどばんばんコメントしてくれるとありがたいです

第3話：夢見（前書き）

こんにちは～
第3話です。
まだまだ、駄文ですが最後まで読んで
下さったら幸いです！

第3話：夢見

日も暮れたころ、ようやく今日のすべての仕事が終わった。
店は閉店時間になり、あれほど騒がしかった客たちの声も全くなくなった。
暖炉が焚かれた暖かい部屋に3人は夕食も終え、ゆっくりとくつろいでいる。

「へえ、記憶がないなんて不安にはならないのかい？」

アッシュの記憶喪失の話を聞いて、エレナは驚いたように首をかしげた。

「まあ、最初のころはいろいろと不安だったけどさ、いつまでもくよくよしていたって記憶がもどるわけじゃないし。もういいかなー、って思ってさ」

明るく笑うアッシュにエレナとジョゼフは顔を見合せてほほ笑んだ。

「アッシュらしいっちゃアッシュらしい話だな、そりゃ。ここでは俺もエレナ
も家族同然だ。遠慮しないでなんでも言いな」

「そうだね、人手不足も補えたし、夫婦二人きりで寂しかったとこだし。
アッシュには来てくれてよかったよ」

俺の頭を撫でるエレナの手つきはとても優しくてくすぐったくて少し照れくさくなった。

「さあ、今日はもう寝な。明日も働いてもらうからなおやすみ、アッシュ」

「うん」

ジョゼフの言葉にアッシュは素直に頷いて先ほど準備をしてもらった寝室へ行　た。
よっぽど体は疲れていたらしい。フカフカのベッドに入るとすぐに眠りに落ちていった。

【「た・・・・たすけて」

目の前には女のひと。

血でせっかくのきれいな服が汚れてしまっている。
何で震えているの？
かわいそう。　たすけてあげなきゃ。

「いやっ」

どおして？
たすけてあげようとしているのに・・・・・

「殺せ・・・・・殺せ・・・・・！」

だれかのこえが聞こえる。
地獄のそこからわきでできたような、こわいこえ。
このこえ・・・・・聞いたことある。

・・・・・・・・・・・・・・・だあれ？・・・・・・・・・・】

「・・・ッシュ！アッシュ！」

目を開くと、慌てたようなエレナの顔が視界に飛び込んできた。
額にはじっとりと寝汗をかいている。

「おばちゃん？」

寝起きの掠れた声で言うとエレナは安心したように
息を吐き出した。

「よかった。アッシュ、あんたずいぶんうなされてたよ。
ほんと、あたしらが見ていられないくらいにな。何か怖い夢でも見
たのかい？」

エレナに言われて夢を思い返してみる。
何か、よくない夢をみたような気はするが、内容が全く思い出せな
い。

「・・・わかんねえ」

正直にそう言うとエレナは「そうかい」と言って笑った。
本当に何の夢を見ていたのだろうか？

「エレナ！早く朝飯食わねえと店開けの時間になっちまうぞ！」

扉の向こうでジョゼフの大きな声が聞こえる。
それを聞いて、アッシュはあわてて着替え始めた。
いつの間にやら洗濯されていた自分の服をすばやく着替え、エレナ
と一緒に
朝食を食べにいった。

第3話：夢見（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました！

第４話：片隅（前書き）

やっと土台ができてきました～
文章の技量がない作者がつくった文章なので
訳がわからないところがあるかもしれません；
ご了承くださいませ

第４話：片隅

ガヤガヤと喧騒がひしめく店の真ん中でアッシュは忙しそうに荷物運びを
していた。
昨日と変わらず、店は繁盛しているようだ。

「アッシュ！この荷物、このお婆ちゃんの家まで持って行っておあげ！
お婆ちゃんだけじゃ、こんな大きな荷物持って行けないからねえ」

「はーい！」

そう返事をしてエレナが示した老婆の元へ駆け寄り、たくさんの荷物が入った
段ボール箱をよいしょ、と抱える。

「んじゃ、行きましょうか。荷物は俺が持ちますんで」

愛想よく笑ってみせると、老婆はしわしわの手でアッシュの手を握る。
そして「ありがとう」と言った。
何かがくすぐったくて、照れ笑いを返す
きれいに舗装された石畳を老婆とともに歩いていると

老婆がおもむろに口を開いた。

「お前さんはアッシュって言ったかね？」

突拍子もない質問に思わず面喰いながら「はい」と返事をする。

「じゃあ、ヨハンナの言ってた子はお前さんなんだねえ」

ヨハンナとは自分に名前を付けてくれた恩人の名前。

「え、婆ちゃんのこと知ってるんか！？」

驚いて素っ頓狂な声をあげると老婆は上品に笑った。

「私の名前はマルティナ。ヨハンナの旧友だよ」

マルティナと名乗って、メガネの奥の瞳を細める。

「へえっ、婆ちゃんの友達か！知ってると思うけど俺はアッシュ。今はエレナってゆうおばちゃんの店で働いてる」

自分で自己紹介をするが、まだ慣れていないせいか、胸の内に微妙な違和感が生じる。

過去にはもう諦めが付いているはずなのに、心の片隅では自分の正体を知りたがっている。

強がっていても、少なからず不安が残るのは紛れもない事実だ。

そんな自分自身に呆れてはいるが、どうしようもないだろう。

そんなアッシュの心中を察してか、急に黙り込んだ相手を特に気にも止めずに近くのベンチに腰掛け、空を眺め始めた。

「・・・何だ？　あれ」

アッシュが遠くを眺めてポツリとつぶやいた。
マルティナもその言葉につられて視線を遠くに移す。

二人の視線の先には馬が行列を作り、石畳にそってこちらに歩いてくる。

「ああ、あれは姫様だわ」

マルティナは呆けたように眺めているアッシュに向かって教えた。

この国には王政があり、もちろんの如く、選ばれし王が国全体の政治を取り仕切る。
王になる者に制限はなく、どんな身分の者であろうとも王になれるチャンスが生まれながらに
備わっているのだ。

そうマルティナに聞かされたアッシュはへえ、と気のない返事をしながらも
瞳の奥があこがれと羨望で光輝いていた。

「ここに姫様が来たら深くお辞儀をしなさい」

そうも教えられ、馬に乗って姫がくると言葉通りマルティナに合わせて
直角に腰を折り曲げた。

ちらりと姫を盗み見るとちょうど、姫の乗った馬が通り過ぎるところ。

長い栗色の髪の毛。
大きな青色の眼に控え目についている、長いまつげ。
とても色白で姫、というと誰でも納得しそうな美貌がそこにはあった。

姫の瞳の色は、アッシュと同じ、青色であったが、
姫の色は深く、輝いていて、しかしどこかに寂寥感を感じさせられるものであった。

―この人・・・どこかで・・・・

「会ったこと、ある・・・・」

ポツリとつぶやいた一言にどれほど重要な意味が隠されていようとはこのときのアッシュには知る由もなかった。

第４話：片隅（後書き）

読んでくださってありがとうございましたあ～

第5話：姫（前書き）

こんにちは～
今回のは割と楽しく書きました。
皆さんも楽しんでくださいね～

第5話：姫

その後、マルティナを無事に家まで送り届け、店に戻ったのはいいがあの姫のことが気になって仕方がない。

姫の名前はティアナ。
マルティナが自分の名前と似てるのよ、と言って冗談っぽく笑っていた。

誰だろう。
ずっとその疑問ばかりが頭の中を渦巻いて、仕事にも集中できなかった。
今はお昼休みで、エレナがアッシュのことを気遣って、早めにとってくれたのだ。

なんだか、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
顔でも洗って気分を変えようと思い、洗面所に向かうとエレナが心配そうに
アッシュの方を見ていた。
ジョゼフも同じだ。これ以上、二人に心配はかけたくない。

困ったような顔を鏡の前に映して、力強く顔を拭いた。
わしゃわしゃと髪の毛をまさぐる。

「・・・・よしっ！・・・・・」

最後の仕上げに頬を両手で叩いて気合いを入れ、
エレナと入れ替えりに仕事場に戻る。

「無理はするんじゃないよ！」

一言、言われ、大丈夫だというように頷いて元気よくレジの仕事にとりかかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーー

「はあっ、疲れた！」

やっと閉店時間になり、アッシュが安堵の溜息をつく。
外に出してある商品に丈夫な布を被せて、埃がつかないようにした。
以前、商品を外に出したままにしていて盗まれないのか、とジョゼフに聞いたことが
あるが、ジョゼフは笑って「この街には盗人のような悪者はいないんだよ」
と言っていた。

「おっちゃーん、おばちゃーん。終わったぜ！」

裏口の戸締りをしながら呼びかける。
「おう、お疲れ！今日の晩飯はシチューだ。冷めないうちに食べよう」

「シチュー！やった！」

ジョゼフお手製のイスに座りながら歓声をあげる。

「あのな、今日な、姫様を見たんだ！」

エレナがへえっ！と驚く。

「姫様が街に来てたのかい？珍しいねえ。美人な方だったろ？」

「おうっ！すっげえ美人だった！でも俺さ」

そこでアッシュが言葉を詰まらせると二人は顔を見合せて
優しく微笑んだ。

「どうした？アッシュ？俺らには何でも言うんだぞ」

ジョゼフがシチューを頬張りながら、先を促す。

「姫様に俺、会ったことがあるような気がするんだ。どこでかは分
かんねえけど・・・」

「そうか。じゃあ、アッシュが失くした記憶にもしかしたら関係が
あるのかも
しれないな」

失くした記憶ん中にあのティアナとか言う姫様がいるのか？
もしいるとしたら何で・・・・。

俺が目を覚ましたところは砂漠の真ん中だったんだぞ？
あ―、わっかんねえ！

「今は分からなくていいんだよ。アッシュはアッシュのペースで少
しずつ、思い出していけばいいのさ。そうじゃないのかい？」

エレナが空になったアッシュの皿におかわりのシチューを入れながら言った。

「そうだよな！ありがとな、おっちゃん、おばちゃん！」

何かが吹っ切れたようにそういうと元気よくシチューを再度おかわりをした。

第5話：姫（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

第６話：発端（前書き）

１つ目の山場です！
ここまで来るのが思ったより早かった・・・。

第6話：発端

エレナたちの店に住み込んで働き始めて早くも1か月がたとうとしていた。
仕事にもすっかり慣れ、近所の人たちとも仲良くなることができた。
中には、俺が外から来た、記憶喪失者という情報をどこからか仕入れて、
変な噂も流れてしまったこともあったが、そんなことがある度にエレナとジョゼフが
何度も助けてくれたのだ。
毎日がとても充実している。

ティアナ姫とはあれから全く接触は、ない。
新聞なのでティアナ姫のことが稀に取り上げられているが、それだけだ。
俺が一時期感じていた、懐かしさも気のせいだったのかもしれない。
そう思い始めていたとき、事件は起こった。

「あ、アッシュ！ちょっと！」

アッシュが仕入れた品をきれいに商品棚に並べているとエレナの焦ったような声が呼んだ。

「何ー、どうしたんだよ。おばちゃん」

真っ青な顔になってアッシュを見るエレナの片手には新聞が握りしめられている。

「これ・・・あんたの顔じゃないのかい？」

声が震えている。

「え、どれ？」

エレナが指をさしたのは探し人の欄。
このコーナーでは遭難して行方が分からなくなった人やなんらかの理由で
行方不明になった人の発見を訴えるところだ。
下へ視線を落としていくと、そこに確かにアッシュの顔写真があった。

白黒でわかりにくいが、目ではっきりと確認できる。
写真の下には１５歳くらいの少年、捜しています。
と大きく書かれている。

「う、嘘だ。これ、俺じゃないっ」

頭を左右に振って動揺を隠そうとする。

「アッシュ・・・」

「違うっ！人違いだ」

「なんだ、どうした？」

騒ぎを聞きつけて、配達から戻ってきたジョゼフが家に顔を出す。
エレナから新聞を受け取るとみるみると顔が険しくなっていく。

「アッシュ、これはお前だな？」

「違うっ！絶対に！」

ジョゼフの優しい問いかけにも反論する。

「アッシュ、よく聞け」

ジョゼフはアッシュと視線を合わせた。

「これは、アッシュにとっていいことだと思うんだ。この写真を載せた人がお前の母さん
だったら、アッシュは俺らのそばで暮すより、母さんのそばで暮したほうがお前は幸せに
なれる。アッシュだって、記憶を取り戻したかったんだろ？そう聞くといつもお前は否定
していたけど、きっとそう思ってたはずだ。だから・・・」

「俺・・・、ずっとここにいたいよ・・・。ここから離れたくない。絶対いやだ！
絶対、ここから離れないからな！」

そう言って、アッシュは店を飛び出した。
目指しているのはヨハンナたちの家。いやなことがある度にあの家に行っていた。

ヨハンナに助けを求め、一直線に走りぬけていく。
まさか、その奥に絶望が待っているのだということも知らずに・・・。

第6話：発端（後書き）

最後までよんでくださってありがとうございます。
今までは何となく明るい雰囲気だったのですが、
この先からは、シリアスな雰囲気に変っていきます。
まあ、最後に「絶望」なんて予告してあったら
誰でもわかるでしょうけど；

アッシュくんの物語、応援してあげてくださいね

第7話：哀（前書き）

こんにちは～
今回は悲しいです・・・
まあ、どんな風に、と聞かれても困りますが・・・

第7話：哀

どのくらい走っただろうか？
激しく呼吸を乱し、アッシュはヨハンナの家の前に立っていた。
雨が降っている。家を出てきたころは降っていなかったのだが、いつの間にか
雨が降っていて、体はびしょ濡れになってしまっていた。

「婆ちゃん・・・」

力なくベルを鳴らし、小さくつぶやく。
しかし、いつまでたっても応答がない。
不審に思ったアッシュはドアノブに手をかけ、ひねってみる。
・・・開いた。鍵かけ忘れたのか？

「婆ちゃん？いねえのか？返事しろよ・・・」

家の中に漂う、異様な雰囲気に少したじろぐ。
ひとつのドアの前に立つ。ここの部屋はヨハンナとその夫、クルトの部屋だ。
いやな予感に胸が騒いでいる。
恐る恐る、ドアを開けた。

「・・・・・・・・え・・・・・・・・」

頭の中が真っ白になった。
目の前に力なく横たわっているのはヨハンナとクルトの身体。
その下には真っ赤な血が白い絨毯をまばらに染めている。

「っ・・・・・！婆ちゃん！爺ちゃん！」

うまく動かない足を奮い立たせて、ヨハンナ達の元に駆け寄る。
呼吸音が口から感じられなかった。
・・・死んでる？・・・
何で？誰がこんなこと・・・・。

「おいっ、まだ一人いたぞ！」

突然、背後から男の声が聞こえてきた。
後ろを振り返ると、体格がよく、髪の毛を金色に染めている男が銃を片手に
立っていた。

「おや。ババア等だけで終わりかと思ってたのにガキが一人いやがったのか」

「お前が、婆ちゃんたちを、殺したのか」

男の戯言を聞こうともせずに、低いうなり声にも似たような声でアッシュが問うた。

「ああ。ババアは仕事に邪魔だったんでな。悪いが死んでもらった。
まあ、どうせ老い先も
短いだろうからな。死んだっていいだろ」

男がそう偉そうに言って高笑いをする。
アッシュの思考回路が完全に停止した。もう、理性も抑えられない。

「ああ？また居たのかよ」

もう一人男が入って来た。

「お前ら・・・。許さねえ」

男たちに聞こえるか聞こえないかの声で呟くと、テーブルの上に置きっぱなしに
してあった果物ナイフを手に取り、男たちに飛びかかっていった・・・・―

第7話：哀（後書き）

第7話は少し残酷になってしまいました。
婆ちゃんたちが殺されたり・・・
苦手な方は、すみませんでした。

第8話：記憶（1）（前書き）

こんにちは～
８話ではアッシュくんの記憶のお話です

第8話：記憶（1）

『レオ』、貴方がお父様の宝物を盗んだのね・・・・

『レオ』、お前がこの女を殺せ！

『レオ』、助けて・・・。こんなお母さんを赦して・・・

思い出した・・・・。

血に濡れた手を呆然と眺め、ぽつりと心の中で呟いた。

俺は「アッシュ」じゃない。

俺の本当の名は・・・・『レオ』

記憶の始めは5年前。

アッシュがまだ、レオだったころの話・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「母さん、大丈夫？」

ベッドに寝込む母親の衰弱した顔を覗き込みながらレオは心配そうに聞いた。

母親は昨年から重い病にかかり、それからベッドに臥せた生活を強いられていたのだ。

医者から先ほど受け取った薬を取り出し、水と一緒に手渡す。

「大丈夫だよ。今日は調子がいいから」
白い顔に微かな笑みを浮かべて言う。
「そっか。じゃあ、俺、仕事に行ってくるな」
「気をつけて行ってくるんだよ」
頷いて家を出る。
向かう先は王家の城。レオは城内の雑務を毎日こなしていた。
元々、王家に仕えられたのも母のおかげだった。
病気になる前は一番末のティアナ姫の世話係だったのだ。
ティアナ姫とはずいぶん仲が良かったらしく、姫が王に直接レオを
城内の仕事に
つけるように懇願したというわけだ。
「レオ、レオ」
俺が人気のない廊下で窓ふきをしていると、背後から自分の名を呼
ぶ声が聞こえた。
「ティアナ・・・また部屋を抜け出したのかよ」
半ばあきれ顔で言う。
レオもまた、母と同じようにティアナと仲良くなり、仕えて一年目
の今では
お互いを名前で呼び合うほどに仲良くなっていた。
「あら、いいじゃない。どうせ次は退屈なお作法の授業ですもの」

「そうだな。ティアナには作法なんて似合わないし」

「お外で遊んでいるか、レオとお話をしている方が何倍も楽しいわ。窓ふきはあとにして
私と遊びましょ？」

ふふっと優雅に笑ってティアナが手招きをする。
それに対し、レオは困ったような表情をした。いくら姫の誘いとあっても
今は仕事中だ。

「俺、今仕事中なんだけど。これ終わってから遊ぼうぜ！今日はこれで仕事終わりだからな！」

「そうね。じゃあここで見てる」

ちょこん、と階段に座って屈託なくわらう。

「おう。すぐに終わらせるから！」

第8話：記憶（1）（後書き）

第8話は何回かによって分けさせていただきます。
次からは第9話とせずに「記憶（2）」というように
表示させていただきますのでよろしくおねがいいたします。

記憶（2）（前書き）

更新遅れました（汗）

記憶（2）

それは秋の夕暮れのときだった。寒い木枯らしが頬を撫でる、そんなとき。

一人の男がレオに歩みよった。
レオは元々警戒心が強い。近づいてくる男に対して一歩、間合いをおく。
あの一言が飛び出るまでは…

「君のお母さんの病気を治したくはないかい？」

それは、とてつもなく甘美な響きを持った言葉。
レオの母親の病気は不治の病と医者から評されていた。

ごくっと固唾を飲む。
確かに、それが本当ならば喜んで男に付いていくところ。
しかし、本能が危険だと警報をけたたましく鳴らしているのだ。

「ど、どうやって…」

「特効薬を、偶然作ることが出来てね。まだ試作品だが効き目は保証するよ」

特効薬…。
冷や汗が一筋背中を伝った。

「代金は？」

男がクスッとほくそ笑んだ。

「王の秘宝…」

王の秘宝…？
名前だけは聞いたことがある。何でも、王座を勝ち取った者に受け継がれて行く伝説の宝石だとか。

誰しも見られるわけではない。謁見し、触れることができるのは王が心から愛した者のみ。
秘宝に対しての権利を持っているのは現王様だけだ。

「そんなの、俺には無理だ。俺は実物を見たこともない」

「そうかな？君の友達を使えば…不可能ではないだろう？」

「何言って…」

とても嫌な予感がした。

「賢い君なら分かるだろう？ティアナ姫のことだ。あの姫はいい駒になる」

「駒…？ティアナは道具じゃないっ！…俺の友達だ！」

「くくくっ…君は最高だよ。まあ、いい。今選べ。この特効薬で、母親を助けるか…。それともティアナ姫との友情を守るか。２つに一つ」

男は内ポケットから錠剤の入った小瓶を取り出し、これみよがしに振って見せる。

レオは唇を噛み締めた。

卑怯で最悪な決断を求める。

結局、レオは男の条件を飲み込んでしまったのだ。

母親の、家族の命の尊さを知っているから…。

記憶（2）（後書き）

部活などで忙しいので、これからは土日と部活が休みの水曜日にしか更新ができなくなります。

もし、この小説を読んで下さってる人がいたらすみません。

記憶（3）（前書き）

アッシュくんの過去編、長くなってます。
多分、４話で終わるかと思われます・・・汗

記憶（3）

ティアナに頼み込み、秘宝を見せてもらうことになった。
もう後には引けない。罪悪感など、抱えている余裕はないのだ。
男に言い渡された、計画の実行は明日に迫ってきている。

「よくきけ。君は秘宝を見せられたあと、すぐにそれを王の手から奪いとれ。
それからは君の仲間がすぐに迎えに来て、手助けをしてくれる。それまで、余計なことは考えずに指示い黙って従うんだ。いいね？」

これが男の言った計画だった。
朝食を摂ろうにも食欲が出ず、結局何も食べずに家を後にした。
出る時に母親が見せた笑顔に、胸がしめつけられるような思いだった。

「レオ、お父様が呼んでるわ。ふふっ、よかったわね。レオがあんなに見たがってた秘宝を見れるんだもの。言っておくけど、とても綺麗よ。私が欲しいくらいに」

無邪気に笑う、ティアナ。
その笑顔に対して、レオはひきつった笑みしか返すことができなかった。

「レオ、よく来た。正直、君のような若者が秘宝に興味があるとは思わなかったぞ。
まあ、無駄話はここまでにして、早速、見せようではないか」

現王様、ベルホルトが真っ白で豊かなひげを揺らし、寛大にレオを迎え入れる。
嬉しそうに指を鳴らし、例の物を執事に持ってこさせた。
それは、対になっている二つの黄金の腕輪。きれいな紋様とたくさんの宝石が上品にデザインされている。その美しさにしばらく見とれてしまった。

…なるほど、確かに秘宝と呼ばれているのも頷ける。

そう思ったのもつかの間、部屋は突然暗闇に包まれた。
男の計画が実行されたのだ。夜目がきくレオには驚き、固まったベルホルトと不安そうに青ざめているティアナの表情が見て取れた。
すぐにベルホルトが正気を取り戻し、何かを怒鳴っている。
その時にレオは動き出した。

わずかに空気を動かす音が響く。
素早く、秘宝を持っている執事に間合いを詰め、鳩尾に拳を見舞わせる。
執事は気を失い、膝から崩れ落ちる。ゴロン、と床に転げた秘宝を両手で丁寧に拾い、懐にしまった。あとは窓から逃げるだけ。

「レオ…？レオがやったのね…？」

震えたティアナの声。
一瞬、思考回路が停止する。心臓が早鐘をうつ。呼吸がひどく乱れた。

「動揺するな。俺達にしっかり掴まりな。窓から飛び降りるぜ」

ぶっきらぼうな声とともに体が宙を舞った。きれいな円を描き、地上で着地する。
いつの間にか二人の男に挟まれていた。そのまま、手をひかれて走り出す。
馬に乗せられ、城をあとにする。
そのころにやっと城内に明かりが戻った。今頃、秘宝がなくなって大騒ぎになっているだろう。

「ティアナ…ごめん…」

ぽつりと呟き、レオは夜の闇へと身を消した…。

記憶（3）（後書き）

記憶（4）（前書き）

こんにちは。
アッシュくんの過去編、思うより長くなってしまいました（汗）

記憶（4）

その後、男と簡単な取引をして家に戻ったレオは脱力して家につくなりへたり込んでしまった。
取引は極めてシンプルなもので、秘宝を素直に差し出せばあちらもすぐに特効薬を手渡してきた。何かあるものだと力んでいたレオは拍子ぬけしたものだ。

「おかえり、レオ」

母親がベッドから体を起こし、優しく微笑みながら迎え入れる。

「ただいま、あのね、今日は母さんにとっておきのお土産があるんだ」

声が弾む。
懐から特効薬の入った小瓶を取り出す。

「お薬かしら…？お医者様からの？」

「これ飲めば、母さんの病気が治るんだって！特効薬が発明されたんだ！」

「本当かしら…？レオ、ちょっとそれをかしてちょうだい」

小瓶を鼻へ近づけ、何やら匂いを嗅いでいる。
そして、悩ましげに眉をひそめるとレオに薬を返した。

「そうね、大丈夫そうだわ。お水を汲んできてくれる？今すぐにでも飲みたいわ」

「うんっ」

母親はレオが持ってきた水を片手に持つと、一気に小瓶の中の薬を飲みほした。

――――――――――――――――――――――――――

それは一瞬の出来事。
特効薬を飲んだはずの母親の呼吸が止まった…。

「レオ、ごめんね…。最後まで迷惑をかけっぱなしのお母さんで…」

最後にそう苦し気に呟いて…。

母親の手から水の入ったグラスが音をたてて割れた。

「え…」

状況が呑み込めない。
いや、呑み込みたくない。そっと母親の体に触れた。
さっきまで確かに感じてたはずの温もりがなくなっていた。
冷たく、蒼白い肌。

「母さん…何で…」

ガクガクと震える足が体重を支え切れずにその場に崩れ落ちだ。
一筋の涙が頬を伝う。

「全ては終わったようだな、レオナルド」

ふいに懐かしい声と共に、久しく呼ばれることのなかった、自分の本名が頭上から降り注いだ。

緩慢な動作で声の主を見る。

記憶（4）（後書き）

過去編は多分、次回で終わるかと思われます・・！

記憶（5）（前書き）

更新遅くなりましたあ！
すみません、今度こそ頑張ります（汗

記憶（5）

「父さん…」

レオの振り返った先には半年前に仕事で外国に行った父の姿だった。

「父さん…、俺どうしよう…。母さんが死んじまった！！お、俺のせいでっ！」

予期せぬ父親のアーサーの登場に緊張の糸が切れ、気を乱すレオ。
俯く頭をアーサーは優しく撫でた。

アーサーの眼は驚くほど冷たく輝いていたが、床を一心に見つめるレオにはそれを知る由もなかった。

これから、どんな事実を知ることになるか分からなかったように…。

――――――

「父さん…、ありがとう」

事のすべてを話したレオがアーサーに連れて行かれたのは街の隅にひっそりと佇んでいる小さな酒場だった。

何でも、アーサーの知り合いが経営しているらしく、そこに居候できるのだそうだ。

毎日、酒場に来る客に生の演奏をしていた。
元々得意だった、ピアノとバイオリンを活かしたレオなりの恩返しだ。

そんな生活がしばらく続いたあと、レオは不意に聞こえる父親の声で目が覚めた。

夜中の深夜1時を少し過ぎたあたりだ。
半分寝ぼけた目を擦りながら一階に降りていくと、アーサーの友人

とアーサーが下卑た笑い声をあげながら話をしている。

「…ところで、レオとかいうアーサーのガキはよく金を稼いでくれる。ガキの演奏を聞くために客は毎日のように来るからな。たいしたもんだぜ」

「だろ？母親を殺してまでここに連れて来てよかったよ。レオは母親にぴったりでテコでも動かなかっただろうからな。おかげで俺はタダ飯を食える」

「お前らがここに住みついてから４年も経ったか？あれ以来商売は黒字続きだ！
二人分の飯なんか軽い軽い！」

信じられない言葉にレオは目を見開き、半開きのドア越しにアーサーを凝視する。

二人は変わらず笑いあっていた。

「っ……父さん？」

「おお、起きてたのか。どうした？」

口元だけで作られている笑顔。瞳は見たことも無いほど酷薄だった。
その笑みが全てが真実なんだと物語っている。

小さく後退りをした。
震える声で問いかける。

「父さんが、母さんを殺したの…？何で？」

「邪魔だったんだよ。一生治らない病気を持ったあいつが邪魔で仕方なかったんだ」

問いかけに答えられた言葉はあまりにも残酷で。
自分の身に芽生えた殺意を幼いレオは抑える術を持たなかった。
店のカウンターに置かれた鈍く輝くナイフの刃。
体内で燻ぶっている憎悪で成された殺人衝動。

「死んでも許さない…。地獄で罪を償え…！」

艶やかなレオの演奏が毎日響いていた酒場は一瞬にしてどす黒い血の海と化した。

満月の夜、父も母も失った少年は当てもなく、砂漠の道を駆け抜ける…。

記憶（5）（後書き）

アッシュくんの記憶編、終了です！
はあ、書くの辛かった・・・！　笑
どうだったでしょうか??

第9話：忘却

―全てを思い出した。
もう後には退けない。―

「っ―……！」

声にならない呻き声をあげ、アッシュ…否、レオは頭を抱えて蹲った。

新聞に自分が載っていた理由も分かった。
きっと、アーサーの仲間だろう。
敵討ちをしようと血眼になって探しているのだ。

砂漠に出た際も何度か襲われた。
その時に負わされていた傷の跡は背中にくっきり残っているはずだ。

膝を立て、その間に顔を埋める。ぎゅっと自分を抱きしめ、唇を強

く噛み締めた。

こうでもしないと身体の震えや涙が零れてしまいそうになる。

自分に泣く資格がないことは分かっているから…。

罪を犯したのは紛れもない自分自身。

あの男の策略にはまったのも自分自身。

事実は曲げられない。
逃げることは赦されない。

「レオ…」

弾かれたように声の主をみると、自分より深い青色の瞳をしたティアナの顔があった。

はっ、としてその場から飛び退く。

何よりも早く会いたかった存在。

でも、一生会いたくなかった存在。

二つの思いが交差し、はるかに拒絶の意識が上回った。

「…全部、思い出したのね」

ティアナが一歩レオに近付く。

指先がレオの髪を捕らえた。びくっと反応する。

「な、何でここに？」

「何となく…、ここにレオが居るような気がして。砂漠で倒れいたレオをお世話してくれたのはここのお婆ちゃんなんでしょう？そして、レオをアッシュと名付けたのも…」

不意にティアナがレオを抱きしめた。

レオはしばらく抗いを見せていたが、ティアナの腕にこもる力の強さの意味を理解し、身を委ねた。

「何で、秘宝を盗んだの…？」

声の先端が僅かに震えてる。

「母さんの病気を治したかったんだ…。変な男が秘宝と引き換えに特効薬をって…。だから…」

「…でも、死んでいたわ」

「……」

ティアナの言葉にレオは黙り込む。
微かに肩が震えている。

「もうひとつ聞いてもいい？」

「うん…」

「アーサーはレオが殺したの…？」

「っ……！」

「この人たちも？もしかして、お婆さんたちも？」

「や、やめろっ！」

叫んでいた。
過去に対する圧倒的な恐怖。

辺りを見回すと、あちこちに血痕がある。
自分の手にも、握っている果物ナイフにも。

まだ、認めたくなかった。
自分が人を…両親を殺してしまった事実を。

ティアナの腕を乱暴に振りほどき、ナイフを床に落とす。

「レオ！逃げないで！逃げちゃ駄目。私の話を聞いて！」

ティアナの叫びも虚しく、言葉を言い終える前にレオは走りだしていた。

先ほどより、強くなった雨を避けようともせずに――…

第１０話：逃げ場

「寒っ…」

どのくらい走っただろうか？
嫌というほど雨水を吸いこんだ服が重たい。
そしてなにより、すごく寒かった。

この国「シャナグフィア」は砂漠に隣接している小国だ。
その影響もあってか、雨が降ることは多くない。
今日のような雨の日はとても珍しいのだ。

そんな他愛もないことをぼんやり考えている自分に苦笑いが漏れる。
思いの外、一人になっていても冷静だった。

取り残してきたティアナは今頃、どうしているだろうか。
城へ戻ったのかもしれない。
そうすれば、俺の人生は終わりだ。
ティアナの口から王へ俺のことが伝えられれば、即刻兵士たちが探しにくるだろう。

逃げ場のない俺は容易く捕まり…

処刑される――…

あの正義感の強い王が人3人を殺し、さらに窃盗までをもした自分を見逃すなんてことはありえない。

どうせ殺される運命にあるのならば、自分の手で自分の罪を葬ろう。母親の面影を残した、あの家で。

そう決意し、顔をあげた。
途端、虚を突かれ息を飲む。

「…どうやら神様は罪を犯した人間を簡単には死なせてくれないらしい」

ぽつりと呟いた。

目の前にはジョゼフとエレナがいた。
片手に傘を持ち、肩を上下に激しく動かしている。

「アッシュ…」

「来るな！何で…何で来たんだよ！俺は、アッシュじゃない！」

「全部、ティアナ姫から聞いたよ」

「え…？」

エレナの予想もしなかった答えにレオは言葉に詰まった。

「驚いたさ。急に店の中に姫が慌ててかけこんできて、アッシュを助けて
って言われるんだからさ。急いで店じまいをして飛び出してきたんだよ」

レオは黙って俯いた。
自分が今、どうするべきか分からない。
記憶を取り戻し、自分が犯罪者であるとわかった。
もうエレナ達のそばに居る訳にはいけないだろう。迷惑がかかる。

「俺…は」

しずくが一筋頬を伝った。
これは雨なのか、涙なのか…

ぐらりと身体が傾いた。
全身が熱い。

薄れゆく意識の中でレオは心の中で問いかけた。

【母さん…おれ、どうすればいいの…？】

今は居ぬ愛しい母親に向かって…

第11話：悪夢

ここ…何処だろう？
全部が真っ白だ。
空の青色も砂漠の砂の褐色もない。

歩いても歩いても、白以外には出逢えなくて―…

「レオ、レオ」

「！　誰！？」

「もう忘れられちゃったのね…」

悲しそうな声。

「…母さん？」

「久しぶりね、レオ」

ふふっと母さんの声が笑う。
つられて俺も微笑む。

久しぶりの感覚だ。
「幸せ」以外に表現しようもない。

ずっとここに居たい。
そう強く思った時だった。

「何で…お母さんを殺したの？レオを愛してたのに」

残酷な問いかけ。
一瞬にして周りの白が真っ黒に染まってゆく。

「なぜ俺を殺した…！」

父の声と共に血まみれの体がぼうっと浮かび上がる。

「なぜだ！なぜだ！なぜだ！なぜだ！」

死体と化したそれが鬼の形相で幾度も問う。
1人2人と増え、レオを囲んだ。

「あっ…」

言葉が出てこない。
恐怖が、震えが全身を支配して体が言うことを聞かない。

その場にしゃがみ、きつく目を瞑り、耳を塞いだ。
そうしてもなお、沢山の声が頭に直接流れ込んでくる。

「やめろっ…やめろ…！」

掠れた叫び声さえも憎悪の声に掻き消される。

「こんなのは嫌だ…！」

「死んで償え！」

「そうだ！死ね！俺たち見たいに血まみれで死ねよ！」

死体たちが一斉に襲いかかってくる。
ナイフを持って。

「うわあああああああっ！」

「レオ…お母さんと死にましょう？2人なら怖くないわよね？」

レオの視界は真っ黒に塗りつぶされた…――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4844e/

永遠の旅路を

2010年11月21日03時05分発行